

信濃教育

巻頭言

座ぶとんのような人

長野県PTA連合会が主催して「長野県三行詩コンクール」が毎年行われている。小学生、中学生、一般の方から、家庭や家族、命をテーマに、思い思いの短文が寄せられる。

「親思う 心にまざる 親心 今日のおとずれ 何ときくらん」は、自身の処刑前に読んだ吉田松陰の辞世の句として有名だが、三行詩には、親が子を思う親心の他、子が親に感謝する思いなどが語られ、読む者の心を温かくする。

今年の作品の中で、私のはつとし、そして自分の教師生活を自問した三行詩がある。それは、中野市豊田小学校の小林陽芽（ひめ）さんの作品である。

「妹が心配で休み時間に見にいつてるけど楽しそうにあそんでいる」

何か妹のことで心配することがあるのだろう。きっと授業中も気になっているのだろう。休み時間になったので、そっと妹の様子を見に行ったところ、楽しそうに遊んでいるのを見て、安心して自分の教室に戻るのだろうか。妹のことを心配するお姉さんの心情が、飾ることなく素直に語られている。

授業中妹のことを気にかけるこの子は、どのような表情でいるのだろうか。私は教壇に立っていたとき、このような子どもに「授業に集中しなさい」と注意しなかっただろうか。子どもたちはそれぞれに、何かが心の中にあり、それを背負い日々生活している。その一つ一つを教師がすべて知ることはできないし、知らない方がいいのかもしれない。しかし、である。いろんなものを抱えながら生活しているだろう子どもたちにとって、そこにいてくれるだけでほっとできるような教師でありたいとは思っているのである。そういう存在になるためにはどうしたらいいのだろうか…。

相田みつをはそういう人を「座ぶとんのような人」と言った。私は座ぶとんのような人にはなれなかったが、努力はしてきたつもりだ。この三行詩を読みながら、そう言い訳をしていた。